様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 １４ 日現在

機関番号：３４４１６
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2014～2015
課題番号：２６７７００１７

研究課題名（和文）〈非理想理論〉を起点とした倫理学・政治哲学方法論の再構築

研究課題名（英文）Toward a Non-ideal Methodology for Ethics and Political Philosophy

研究代表者
松元　雅和（MATSUMOTO, MASAKAZU）

関西大学・政策創造学部・准教授

研究者番号：００５２８９２９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、〈非理想理論〉に基づく倫理学・政治哲学において、新たに要請される正義論の方法論上の特質を、従来の〈理想理論〉との対比から解明することである。その成果として、1）非理想状況がもたらす諸制約の解明に従事し、思考実験の方法を非理想状況に適用する際の問題を特定した。2）個々の政策提案にあたっては、〈理想理論〉〈非理想理論〉双方の成果を踏まえた重層的な理論構成が必要であることを確認した。3）研究の総括として、〈非理想理論〉において要請される正義論の方法論上の特質を、理想化の水準設定、実行可能性問題への対処、正義と正統性の相克という観点から明らかにした。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to understand the nature of methodology for ethics and political philosophy as a non-ideal theory of justice in comparison with conventional ideal theories. The results are as follows: 1) while dealing with the various constraints that result from a non-ideal situation, this study identified the problems of applying the method of thought experiment in a non-ideal situation. 2) It pointed out that when making a concrete policy proposal, we need a multi-layered theory structure that captures both ideal and non-ideal theories. 3) As a conclusion, it clarified the nature of methodology for ethics and political philosophy required in constructing a non-ideal theory of justice, in terms of the levels of idealization, the problem of feasibility, and the contrast between justice and legitimacy.

研究分野：哲学・倫理学

キーワード：方法論　非理想理論　戦争倫理学

１．研究開始当初の背景

J. Rawls によれば、正義論は〈理想理論〉と〈非理想理論〉に大別される。〈理想理論〉とは、正義原理の「厳格な遵守」が期待できる状況下を想定した正義論であり、それに対して〈非理想理論〉とは、それが期待できない状況下を想定した正義論である。従来の倫理学・政治哲学は、Rawls 自身を代表として、これまで理想状況を仮定した、〈理想理論〉としての正義論を展開することに圧倒的な労力を注いできた。

しかし今世紀に入ってからは、L. Murphy、A. Swift、A. Sen など、自身の正義論を〈非理想理論〉として自覚的に位置づける論者も増えている。こうした規範的研究内部の力点の変化に伴い、〈理想理論〉と区別される〈非理想理論〉の展開にあたって用いられる方法論の適切性について、再検討することが必要となっている。

筆者はこれまで、現代英米圏の倫理学・政治哲学を対象として、特にその方法論的側面に注目しながら研究を進めてきた。その結果、従来の〈理想理論〉においては、「約束の遵守」や「将来の合理的期待」、「歪められないコミュニケーション」など、条件や情況の抽象化／理想化を伴う思考実験の方法がしばしば用いられていること、またそれが、〈理想理論〉としての正義論の展開にあたり、実際に有意義な方法論的役割を果たしていることが確認できた。

ただし、抽象化／理想化を伴う思考実験の方法は、本来「完全な遵守」が期待できる理想状況下を想定した正義論の展開において用いられてきたものであり、それを「完全な遵守」が期待できない、非理想状況下を想定した正義論の展開にあたってどのように用いるかは未決の問いである。この問いに答えるためには、〈理想理論〉〈非理想理論〉の構造的差異を把握したうえで、〈非理想理論〉としての正義論の展開にあたりどのような方法が適切かを、体系的ならびに個別的に検証してみる必要がある。

２．研究の目的

そこで本研究では、〈非理想理論〉に基づく倫理学・政治哲学において展開される正義論の方法論上の特質を、従来の〈理想理論〉との対比から解明することとした。具体的には、

（1）　非理想状況がもたらす諸制約の解明：〈理想理論〉で通常用いられる思考実験の方法に対して、非理想状況がもたらす理論的諸制約を特定する。

（2）　非理想状況を踏まえた方法論の再構築：理論化に必要な抽象化／理想化の水準に注目しながら、〈非理想理論〉を展開するための方法論的指針を提案する。

特に本研究の特色としては、〈非理想理論〉の具体例として現代英米圏の正戦論を取り上げる点である。

３．研究の方法

本研究では、〈非理想理論〉に基づく倫理学・政治哲学の方法論上の特質を、以下二段階にわたって段階的に解明した。

第一の段階は、(1) 非理想状況がもたらす諸制約の解明に従事し、思考実験の方法を非理想状況に適用する際の問題を特定することである。具体的には、

（1）① 思考実験の方法論的特徴を解明する：Rawls の「原初状態」、R. Nozick の「保護協会」、R. Dworkin の「無人島オークション」「仮想的保険市場」、B. Ackerman の「宇宙船」などに代表される思考実験の方法が、従来の〈理想理論〉としての正義論において果たしてきた方法論的意義を再検証する。

（1）② 〈非理想理論〉における「事実」の位置づけを〈理想理論〉との対比から検討する：Rawls-Cohen 論争に関する筆者の先行研究を継承・発展させ、正義論の展開にあたって前提とされる「事実」の諸特徴を解明し、それが〈理想理論〉〈非理想理論〉のあいだでどのように構造的に異なるかを分析する。

第二の段階は、引き続き（1）を継続しながら、(2) 非理想状況を踏まえた方法論の再構築に着手することである。具体的には、

（1）③ 〈非理想理論〉における実行可能性問題を〈理想理論〉との対比から検討する：M. Phillips、Z. Stemplowska らの研究を手がかりに、正義論の政策的応用に伴う実践的諸制約に関する筆者の先行研究を継承・発展させ、〈非理想理論〉と〈理想理論〉の方法論的関連性を明らかにする。

（2）① 思考実験に伴う抽象化／理想化の水準を区別し、理論化にあたっての有効性を検証する：現代英米圏の正戦論を一次的素材として具体的に取り上げ、そのなかで抽象化／理想化がいかなる水準で用いられているかを検討し、〈非理想理論〉の展開に適した方法を提案する。

本研究では、現代英米圏の倫理学・政治哲学における規範的研究を本研究課題の一次文献、方法論的研究を二次文献と位置づけ、それらの収集・整理・分析を通じて、以上の研究計画をそれぞれ平成 26・27 年度に実施した。

４．研究成果

平成 26 年度は、非理想状況がもたらす諸制約の解明に従事し、思考実験の方法を非理想状況に適用する際の問題を特定した。その成果として、「現実主義／平和主義理論における理想と現実」『平和研究』43 号（2014 年 10 月）、69-89 頁では、安全保障構想におけ

る理想化の水準を区別し、〈非理想理論〉においては（「経済人」に類比される）国家意思の単一性や合理性といった理論的仮定の水準を下げざるをえないことを明らかにした。

なお、本研究成果は、「国際政治学における現実主義も理想主義的とされる議論と同様に理想状況において妥当性を主張しているのみである点を明らかにしつつ、理論的な研究が現実において貢献することの意味をあらためて指摘している点で大きな示唆を与えるもの」との評価を受け、日本平和学会第 5 回平和研究奨励賞を受賞した。

また、正義論一般と並行して、その個別理論についても検討した。"On the Durability of Utilitarianism as a Political Theory," International Society for Utilitarian Studies 13th Conference (Yokohama National University, Kanagawa, 21 August 2014)では、功利主義の抽象的・説明的価値を高めることが具体的な意思決定手続きの場面でその実用的価値を損なうこともありうることを明らかにした。

さらには、本研究の副次的成果として、「政治理論の歴史」井上彰・田村哲樹編『政治理論とは何か』（風行社、2014 年）、127-150 頁では、研究教育機関において制度化された、20 世紀以降のアメリカの政治理論に焦点を当て、行動論革命とその批判を中心として、政治理論の歴史上に現れた個々の研究において、経験的次元と規範的次元がどのように関連してきたかを素描した。

平成 27 年度は、方法としての思考実験の再構築に着手し、〈非理想理論〉において要請される正義論の方法論上の特質を明らかにした。その一端として、「規範研究は公共政策にいかに貢献しうるか―方法論的観点から」『政策創造研究』10 号（2016 年 3 月）、21-41 頁では、応用倫理学の方法論的知見も参照しながら、応用研究に従事するにあたっての具体的な方法を原則主義・決疑論・特定化として整理・評価した。

また、〈非理想理論〉の具体例として現代英米圏の正戦論を取り上げ、その方法論的分析を行った。"An Equal or Unequal Right to Kill? A Defense of the Traditional Just War Theory"、13th Annual International Conference on Politics & International Affairs (Titania Athens Hotel, Greece, 15 June 2015）では、思考実験を伴う哲学的分析を通じた J. McMahan ら修正派正戦論の結論が法規範や法実践の場面と背理しうることを論じた。

最後に、本研究の総括として、『応用政治哲学―方法論の探究』風行社（2015 年 11 月）、全 328 頁を上梓した。本書では、〈非理想理論〉において要請される正義論の方法論上の特質を、以下三つの観点から検討した。

第一に、理想化の問題に関しては、倫理学・政治哲学研究は〈理想理論〉の探求のみならず〈非理想理論〉の探求をも含むものであり、特に後者では「現実」の占める位置づけがより大きなものになりうること、それゆえ、どちらか一方を優位に置くというのではなく、両理論の建設的な協働を進めることが望ましいことを論じた。

第二に、実行可能性の問題に関しては、倫理学・政治哲学研究には「望ましさ」の分析とともに「実行可能性」の分析の側面があり、後者の側面からは諸々の実践的制約を無視することはできないこと、また、倫理学・政治哲学者は費用便益分析の利点および限界を明確化することで、政策立案者に対して一定の貢献をすることができることを明らかにした。

第三に、正統性の問題に関しては、1980 年代の英米圏におけるリベラル＝コミュニタリアン論争の要点を方法論的に再構成し、Rawls の「政治的転回」および公共的理由の観念の意味を分析した。さらには、正しさの主題と正統性の主題を区別したうえで、後期 Rawls の政治哲学における真理の位置づけを再評価した。

以上の二ヶ年度にわたる研究成果は、非理想状況下で「応用」することを念頭に置いた場合、正義論の展開にどのような修正が迫られるかという方法論的諸問題についての指針となるものである。また、これらの成果が査読を経たうえで国内の指導的な学会誌に掲載され、学会賞を受賞するとともに、国際会議において公表できたことも大きな成果であった。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　4　件）

①<u>松元雅和</u>、規範研究は公共政策にいかに貢献しうるか―方法論的観点から、政策創造研究、査読無、10 号、2016、21-41

②藤田明史、<u>松元雅和</u>、『積極的平和』とは何か―戦後 70 年の時点に立って、平和研究、査読無、45 号、2015、1-17

③<u>松元雅和</u>、兵士の道徳的平等性に関する一考察、法と哲学、査読有、1 号、2015、103-132

④<u>松元雅和</u>、現実主義／平和主義理論における理想と現実、平和研究、査読有、43 号、2014、69-89

〔学会発表〕（計　8　件）

①<u>松元雅和</u>、政治的悪の規範理論的分析―政治的リアリズムを中心に、日本政治学会、2015 年 10 月 11 日、千葉大学（千葉）

②<u>松元雅和</u>、政治共同体の権利・再考―自衛戦争の道徳的根拠をめぐって、日本倫理学会、2015 年 10 月 3 日、熊本大学（熊本）

③<u>松元雅和</u>、平和（優先）主義の再定義―絶対平和主義および正戦論との関係から、日

本平和学会、2015 年 7 月 19 日、アステールプラザ（広島）

④ Masakazu Matsumoto、An Equal or Unequal Right to Kill? A Defense of the Traditional Just War Theory、13th Annual International Conference on Politics & International Affairs、2015. 6.15、Titania Athens Hotel（Greece）

⑤松元雅和、規範的研究は公共政策にいかに貢献しうるか―方法論的観点から、日本公共政策学会、2015 年 6 月 7 日、京都府立大学（京都）

⑥松元雅和、カタストロフィとしての戦争―正戦論における比例性原理の検討、国際コンファレンス「カタストロフィと正義」、2015 年 3 月 25 日、立命館大学（京都）

⑦ Masakazu Matsumoto、On the Durability of Utilitarianism as a Political Theory、International Society for Utilitarian Studies 13th Conference、2014.8.21、Yokohama National University（Kanagawa）

⑧松元雅和、非軍事介入のすすめ―平和主義の立場から、応用哲学会、2015 年 5 月 10 日、関西大学（大阪）

〔図書〕（計　3　件）

①松元雅和、風行社、応用政治哲学―方法論の探究、2015、328

②松元雅和ほか、勁草書房、グローバルな正義（「より現実的なグローバル正義論へ」「自国民／外国人の二重基準を掘り崩す」「搾取理論に基づくグローバル正義観の刷新」）、2014、230（78-80、131-133、170-172）

③松元雅和ほか、風行社、政治理論とは何か（第 5 章「政治理論の歴史」）、2014、318（127-150）

6．研究組織

(1)研究代表者

松元　雅和（MATSUMOTO, Masakazu）
関西大学・政策創造学部・准教授
研究者番号：00528929